

種子更新で良質米生産

必読

水稲の育苗管理は万全に！！

飛騨地域では、近年、細菌による苗腐敗症の発生が目立ち始めています。発病を抑えるため、必要な防除の実施と管理の徹底をお願いします。種子の取り扱いや育苗管理には、万全を期し、良質な苗づくりに努めましょう。

1 消毒方法

- 消毒済み種子（薬剤吹き付け種子）は、苗腐敗症の発生リスクを減らすため種子を「モミガードC・DF（ドライフロアブル）」と「スミチオン乳剤」で消毒を行っています。
- 無消毒種子を使用される場合は、各自で「モミガードC・DF」と「スミチオン乳剤」で種子消毒を行って下さい。

2 追加防除

- 苗腐敗症対策を徹底するため、催芽時（蒸気式催芽器を使用する場合は催芽前の浸種時）に「モミホープ水和剤」で追加防除を行って下さい。
- 薬剤吹き付け種子を購入した場合でも、追加防除は各自で行って下さい。

3 催芽作業

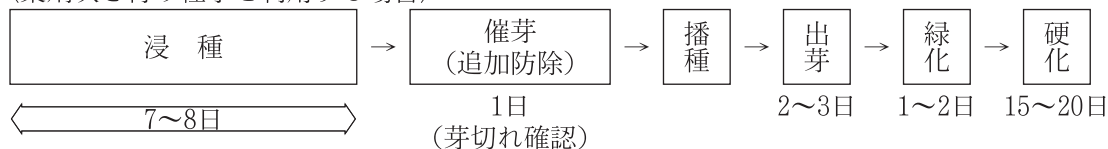
- 循環式催芽器は、苗腐敗症の発生を助長するので使用をひかえるか、水を循環させないで使用して下さい。使用する場合は、酸欠に注意し、水が汚れてきたり、腐敗臭が感じられた時は、水を交換して下さい。
- 薬剤による黒い「アク」が発生し、容器やホースにこびりつくことがあります。この場合は洗浄を十分行なって下さい。

4 播種

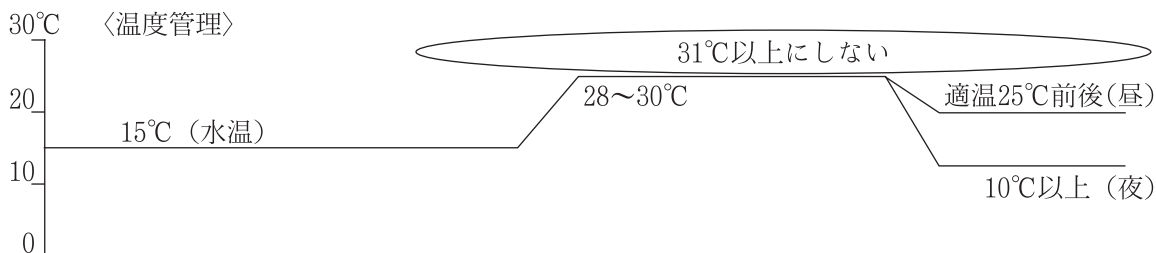
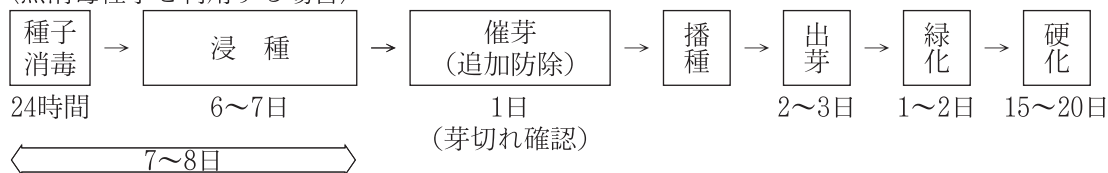
- 播種作業は十分発芽を確認してから行って下さい。

5 育苗の過程と温度管理（31℃以上に絶対しない。）*循環式催芽器の場合

〈薬剤吹き付け種子を利用する場合〉



〈無消毒種子を利用する場合〉



（一社）岐阜県米麦改良協会、飛騨農林事務所農業普及課、下呂農林事務所農業普及課、病虫害防除所飛騨支所、中山間農業研究所、飛騨農業協同組合、飛騨農業振興会

育苗の注意点

1 浸種

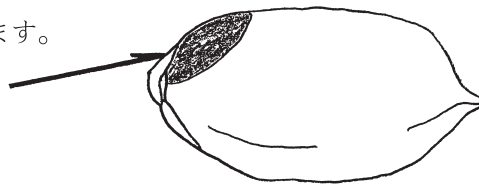
- 乾粃の2倍量（容積比）（重量比＝1：4）の水に浸種します。
- 吸水は、15℃程度の水温で十分に時間をかけて行います。
- 吸水の目安は、粃の外から胚が見えるようになるまでです。
- 必ず全ての粃が吸水していることを確認して下さい。

（重量比の場合）

乾粃(kg)	水(ℓ)
4	16
10	40

— 十分吸水した粃 —

- 粃がらが透きとおってアメ色になります。
- 白くなった胚が目視で確認できます。



— 目標水温と浸種日数の目安 —

品 種	目標水温	浸種日数	積算温度
コシヒカリ、ひとめぼれ	15℃	8日間	120℃
たかやまもち、ひだほまれ	15℃	7日間	100℃

2 消毒（無消毒種子を購入した場合）

- 浸種の直前にモミガードC・DF（200倍）とスミチオン乳剤（1000倍）の混合液に24時間浸漬して消毒を行います。

乾粃：処理薬液＝1：1（容積比）（重量比＝1：2）

乾粃4kgで水量8ℓの場合→モミガードC・DF40g、スミチオン乳剤8ml

- 消毒後は、薬液から種子を取り出し、種子を水洗いせずそのまま水に浸し、「1 浸種」の工程に入ります。

3 追加防除（薬剤吹き付け種子、無消毒種子のどちらを購入した場合も実施します）

- 追加防除は、催芽時（蒸気式催芽器を使用する場合は催芽前の浸種時）に苗腐敗症対策を徹底するため、モミホープ水和剤の200倍液に24時間浸漬して行います。

乾粃：処理薬液＝1：1（容積比）（重量比＝1：2）

乾粃4kgで水量8ℓの場合→モミホープ水和剤40g

- 蒸気式催芽器を使用する場合、浸種時に追加防除を行い、追加防除後は種子の水洗いや風乾を行わずそのまま催芽させます。
- モミホープ水和剤は、微生物農薬です。特別栽培米等化学合成農薬の使用を制限した栽培にも適しています。

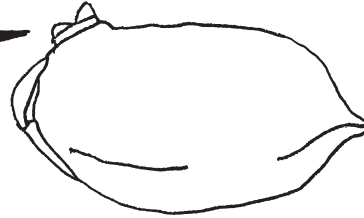
※薬液の残液及び容器の洗浄水等は、用水、河川等に流さず適切に処理して下さい。

4 催芽

- 温度は低め（28～30℃）で管理して下さい。
- 高温下で催芽すると細菌が増殖するので、催芽温度は31℃以上には絶対にしないで下さい。
- 芽が多少伸びるかもしれませんが、全ての粃の90%以上が芽切れしているかを確認して下さい。

— 催芽粃 —

この部分（幼芽）を確認します。



十分に吸水・確実に催芽させてから播種しましょう。

5 播種

- うす播きを励行して下さい。
- 稚苗の場合の播種量は、乾粃で箱当たり160g以下、催芽粃で箱当たり190g以下にしてください。
- ※「ひだほまれ」は大粒のため、乾粃で箱当たり180g、催芽粃で200～210gが目安です。

6 出芽

- 出芽温度は低め（28～30℃）で管理して下さい。
- 高温下で管理すると病気が急増するので、出芽温度は31℃以上には絶対にしないで下さい。
- 出芽の期間は2～3日とし、出芽長が1cm程度となるよう余裕を持って育苗計画を立てて下さい。

7 緑化

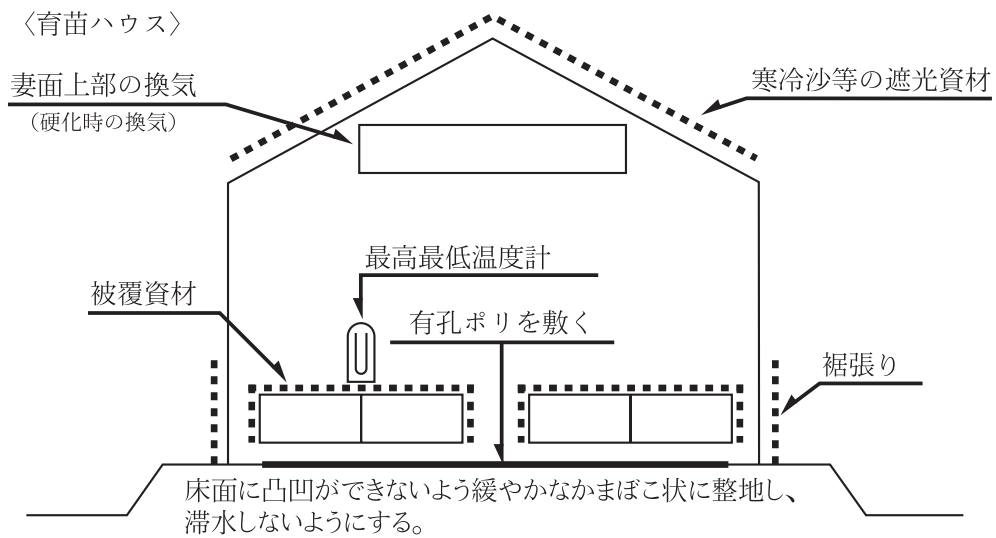
- 緑化の期間は1～2日とします。
- 緑化は、苗を外環境（光、気温）に慣らすことが目的です。むやみに徒長させることは、軟弱な苗になる原因となります。
- 出芽苗は大変デリケートです。移動は午前中の穏やかな天候下で行い、運搬の際には苗を幌などで覆って風が直接あたらないようにします。
- ヤケは高温と乾燥で発生します。出芽苗搬入時に乾燥している場合は、覆土を落ち着かせる程度にかん水します。
- 穴あきや劣化している被覆資材は保湿力が落ちているので使用しない。また、被覆内へ風が侵入すると乾燥を助長します。被覆資材の周辺を直管パイプなどで押さえるなど、乾燥しないよう注意します。

— ハウスの準備 —

- 床面は凸凹がないよう緩やかなかまぼこ状にし、有孔ポリを敷きます。
- 苗搬入の数日前からハウスを閉めきり、ハウス内の地温を上げておきます。
- ハウスには裾張りをを行い、苗に冷気が直接あたらないようにします。
- 遮光は、寒冷紗等で屋根全体を被覆します。なお、遮光は晴天の日は1日程度、曇雨天の日は半日程度を目安に行い、長時間の遮光は避けます。

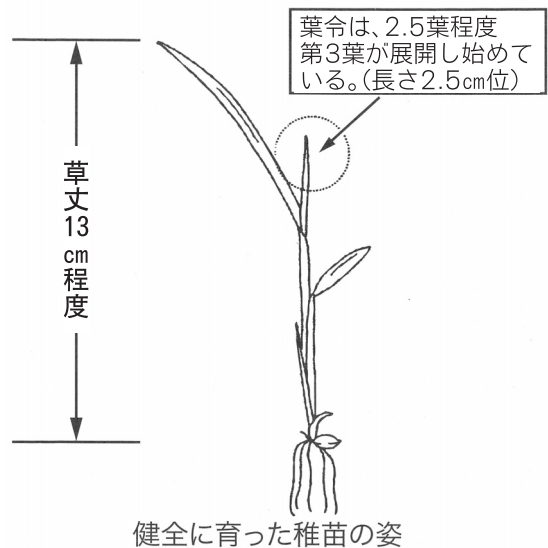
－ 温度管理 －

- ・ 高温（31℃以上）では病気、低温（10℃以下）が長時間続くと障害が発生しやすくなります。緑化の温度は、昼間20～30℃（適温25℃前後）、夜間は最低10℃を厳守します。
- ・ ハウス内が高温（31℃以上）にならないよう、天候を見計らって出入り口やサイドビニールを上げます。特に、霜が降りた日は快晴となり、急激に気温が上昇することが多いので注意します。
- ・ 気温が低いときは、べた掛け資材（ミラシート等）を用いて保温を行います。被覆に太陽シートやラブシートを用いる場合は、ローソクやストーブを用意し低温に備えます。



8 硬化

- ・ 緑化後、硬化期間は15～20日を目安として苗を仕上げます。
- ・ 高温多湿下で管理すると軟弱徒長苗となり、病気を助長し、田植後の活着が遅れるので注意します。（苗を伸ばしすぎない）
- ・ 硬化中は、昼間は20℃位、夜間は10℃位を目安に温度管理を行い、サイドビニールはつとめて解放し、苗を徐々に自然環境に慣らします。（急激な温度変化は、病害の発生を助長するので注意します。）
- ・ 葉の展開に従って、蒸散量が多くなるので、併せてかん水量を増やします。



・ 硬化ハウスで後作（水稲以外）が栽培される場合は、後作物への農薬成分残留防止のため、ハウス内での箱施薬は行わないでください。